

分類研究分科会（2007 年度活動報告）

代表者：藤倉 恵一（文教大学）

会員数：5 名

会 員：伊藤 民雄（実践女子大学） 鈴木 学（日本女子大学）
高澤 玲子（獨協大学） 藤倉 恵一（文教大学）
堀 はな恵（鶴見大学）

年会費：3,000 円

例会開催回数：11 回（合宿 1 回含む）

延べ参加者数：54 名

研究分科会ホームページ URL：<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/bunrui/>

活動

1) 基本テーマ

件名、シソーラス、Indexing 理論等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究という基本テーマとする。

今期は近年の分科会研究成果を基盤として、わが国における標準的な図書分類法である日本十進分類法（NDC）を理論的に拡張・性能向上が可能であるかどうか、またその影響はどのようなものであるかなどを検証したい。

2) 活動の概要

上の基本テーマは、前期（2004－2005 年度会期）および前々期（2002－2003 年度会期）の研究テーマを継承して設定したものである。今期は、NDC の新訂 9 版（以下「NDC9 版」または単に「9 版」）に過去の研究テーマで有効性を確認した記号法や分析合成の手法を実装する実験を行った。

分類研究分科会は 2 年間で(1) 研究テーマに沿った文献の精読を通じて参加会員の基礎レベルを整える、(2) 主たる研究テーマの研究・検証を行う、(3) 研究成果の発表および総括 の 3 つの期間に分けて活動する。

2007 年度は第 2 期の途中から研究を継続している。具体的には、以下の手順により研究を行った。

- (ア) 4 月～7 月例会：「出版年鑑」1993～2007 を使用し、教育分野における出版点数 37,705 冊を NDC 別に集計した。さらに、集計した内容をもとに分類番号別の出版点数推移をグラフ化し、NDC8 版→9 版改訂による影響や効果を確認した。
- (イ) 並行して、NDC9 版の列举項目につき名辞、列举順序を（ア）で実測された数値的分布を参考に再検討し、実験版（NDC9ex）を構築した。
- (ウ) 夏期研究合宿：「現代用語の基礎知識」1993、2003、2005、2007 の教育分野の見出語計 162 項目（重複は除く）に対し NDC9 版および NDC9ex を付与し（合宿前）、合宿期間中に付与された分類を検討し、双方の分類付与結果の比較、改訂効果の検証、NDC9ex の問題点の洗い出しを行った。
- (エ) 9 月～3 月例会：（ウ）で発見された NDC9ex の問題点をそれぞれ検証し、再構築していく。

第 2 期の研究活動と並行して、第 3 期の内容である研究報告とまとめについて、第 2 期（ア）～（ウ）の内容をもとに検討を行った。その成果を、2007 年 12 月 14 日（金）に帝京大学にて開催された報告大会において「NDC 発展の可能性をさぐる～教育分野の検

討から～」として発表した。

また、今期の活動の特徴として、以前にもまして類縁団体との連携が強化されたことが挙げられる（後述）。

資料

1) 刊行物

2004年11月13日に開催した分類研究分科会設立50周年記念シンポジウムの記録につき諸般の事情で編集が遅延していた。見積もりが会計処理に間に合わないため、刊行と発送は2008年度早期に行うことに決定した。

2) 事業

ア. TP&D フォーラム 2007（第17回整理技術・情報管理等研究集会）の共催

1991年に日本図書館研究会整理技術研究グループにより始められたTP&Dフォーラムは第2回から分類研究分科会が共催者となり運営に参画してきた。2007年度は分科会代表である藤倉が実行委員長として選出され、さらに分科会現・旧会員から5名が実行委員・事務局として当日の運営の中核を果たした。TP&D フォーラム 2007は8月25・26日に文京区本郷にて開催し、分科会からは藤倉・鈴木・堀の3名が出席した。

フォーラムの参加者は教員、図書館員、データベース業者などさまざまであり、これに分科会が参加・関与することの利点は(1) 主題組織分野における最新の研究動向の把握、(2) 分野を同じくする教員や研究者との交流、(3) この分野の研究基盤継承への貢献 であるといえる。特に(2)の役割は重要であり、過去の蓄積が今年度の活動の多角化につながったといっていよい。

なお、2008年度は8月30・31日に大阪にて開催される予定である。

イ. 日本図書館協会分類委員会への参画

2006年度の夏期研究合宿の検討を通じて、NDC9版改訂後もなお未解決の課題について、10版改訂に向けた要望を日本図書館協会（以下「JLA」）分類委員会に提出したが、その回答に続いて、JLA分類委員長より委員会への参画が打診された。分科会内および所属校と検討の結果、分科会を代表して藤倉が2007年8月より分類委員会に参加し、10版の改訂に関与することとなった。

分類研究分科会会員がNDCの改訂に参画するのは、8版改訂当時の鮎沢修氏（中央大学・当時）以来である。以降、個人委員としての参画だけでなく、分科会全体で委員会に貢献できる環境を醸成していくつもりである。

ウ. 日本図書館研究会整理技術研究グループ50周年記念式典への出席

先に述べたように、西日本を中心に活動している日本図書館研究会整理技術研究グループ（整研；2008年より情報組織化研究グループと改称）と分類研究分科会との交流は既に15年以上に及んでいる。

2007年9月8日、整研50周年記念式典が大阪で開催されるにあたり、現会員から藤倉・鈴木の2名、さらに旧会員から2名が出席した。整研からは2004年11月の分類研究分科会50周年記念シンポジウムに表敬訪問をいただいております、その答礼でもある。

エ. 第93回全国図書館大会第8分科会「ネットワーク環境下の主題検索」運営協力

2007年10月29・30日に東京で開催された第93回全国図書館大会において、15年ぶりに主題組織系の分科会が設けられた。第8分科会の主催はJLA件名標目委員会であった

が、委員が京都・大阪近辺に集中していることから、運営の連絡に支障をきたしていた。

そこで5月、件名標目委員会より分類研究分科会に対して協力の要請が寄せられた。分科会内で検討の結果、現会員から藤倉・鈴木・高澤の3名と、関係者（分科会旧会員および関係者）有志6名から実行委員会を組織し、企画段階から運営協力にあたった（主に事前の大会準備委員会への出席や当日の設営、受付や記録など事務局的部分）。

第8分科会は、当初見込みを大幅に上回る97名の参加があり、しかも大学図書館だけでなく国会、公共、学校、専門図書館それぞれの館種や企業等からまんべんなく参加された。質疑も多岐にわたり、参加者として実りの多い会であったと同時に、分科会会員とJLA件名委員との交流・親睦を深めることができた点で、分科会にも大きな成果であったといえる。

これら他団体との事業連携は、必ずしも会員所属校すべての理解を得られることではないことから、各会員個人の負担になることも少なくはない。分科会の各種関係規則の範囲内で多少なりとも負担を軽減できるよう事業計画を立てていくことを次年度以降の課題とする。

（文責・藤倉恵一）